

渥美奨学生としての一年を振り返って

東京大学大学院西洋史学専攻

楠田 悠貴

カレンダーを見返してみると、私が渥美国際交流財団に初めて足を踏み入れたのは、2022年11月上旬の1次面接の時だった。博士課程の最終年次に在籍する学生に奨学金を支給してくれる財団はほとんどないため、私は飛びつくように応募したのである。1年前の私は、渥美財団が一体どのような財団なのか、ほとんど何も知らなかった。関口の高級住宅街を地図アプリを頼りに彷徨った末、財団の建物を見つけて中に入ったのだが、立派なホールに緊張しきりだったものの、事務局長の角田さんや面接官の方々が私の話を親身に聞いてくださり、心地よく帰宅した。次の12月の2次面接は、ホールに入るや否や面接官の方々が10名ほど並んでいらっしやるのを目にして、私はとても緊張してしまい、面接時間も短かったため、あまり上手く話せなかったと感じ、今回は失敗したと後悔しながら家路についた。しかしながら、まもなく合格通知が届いた。とても嬉しかったことを覚えている。あれからもう1年以上経つとは、時の流れはとても早い。

4月上旬に奨学生の顔合わせがあった。自己紹介で、奨学生の同期には、中国、台湾、韓国、モンゴル、ドイツ、マレーシアなど、さまざまな国からの学生がいることを知った。みんな日本語を流暢に話し、真摯に自分の研究に邁進されている印象で、自分も背筋が伸びるような気持ちになった。ただ、交流を重ねて仲良くなってみると、彼らの印象は段々と変わってきた。やはり、7月上旬に開催された山梨県韮崎への2泊3日の研修旅行が大きかった。私たちはラクーンの方々が企画してくださったワークショップでジェンダーについて学んだのだが、さまざまなレクリエーションが用意されていて、バーベキューをしながら、趣味や出身国の話までさまざまな話ができる。秋は鹿島建設が再開発を手掛けている浜松町駅周辺の工事現場への訪問、毎年恒例の新年会および渥美伊都子顧問の誕生日会など、ほぼ毎月開催される財団のイベントが楽しみでしかなかった。当初は毎月の肩肘を張った財団のイベントに毎回参加することに気が進まないと思っていたが、孤独に陥りやすい文系博士課程の大学院生にとって、こうした楽しい機会を提供していただけたことは大変ありがたかった。今では、来年度からこうしたイベントに頻繁に出席できなくなること、同期の奨学生に会えなくなることを残念に感じている。

また、この1年のあいだ、第21回日韓アジア未来フォーラム「新たな脅威(エマージングリスク)・新たな安全保障(エマージングセキュリティ)」、第20回SGRAカフェ「パレスチナについて知ろうー歴史、メディア、現在の問題を理解するために」、第21回SGRAカフェ「日本社会における二重国籍の実態」など、さまざまなイベントにも出席させていただいた。経済安全保障、イスラエル=ハマス紛争、二重国籍といった現代社会が抱える諸問題と真摯に向き合っており、特にラクーンの方々の活躍に感銘を受けた。渥美財団は、真剣に学術的な議論を交わすことと、美味しい食事を通して世界中の人々と楽しく交流することを両方実現している組織だが、一見両者は正反対に見えるものの、結局のところ、どちらも日本や世界が抱える問題の解決につながっているのではないかと思った。私の専門は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのヨーロッパ史であり、ラクーンの中ではとても珍しいのだが、奨学期間を終えて

からもラクーンの方々と親睦を深め、将来何かしらイベントを企画してみたいと考えている。だが、その前に、私は今年度博士論文を書き終えることができなかったので、まずこちらに精進しなくてはならない。